

特別支援教育（知的障害）

高阪英徳・大津賀夢奈・島あずさ
高木由希・小野村晃太・松下友紀・藤田美代

1 特別支援教育の基本的な考え方

知的障害教育においては、児童生徒の特性や個別の実態に基づいて授業や指導が行われている。一人一人の特性や個別の実態によって、個別の目標を設定し、その課題を達成できるような学習が少人数で行われている。特別支援学校学習指導要領解説各教科等編(2018)においては、「教科別の指導で扱う内容について、一人一人の児童の実態に合わせて、個別的に選択・組織し、児童生徒の興味や関心、生活年齢、学習状況や経験等を十分に考慮することが大切」と述べられており、教科別の指導については、児童生徒の生活に関係のある題材を扱うことや発達段階や生活経験などを考慮し、段階を踏まえて指導していくことが示されている。また、丹野(2022)は、学習内容を段階で示しつつ「学年相当で一律なものでなく、児童生徒等の学習状況等により、一人ひとりが異なっている点を踏まえながら、深い学びにアプローチできる指導を充実させていくことが必要」だと述べている。このように個別の実態を考慮して指導することの充実が求められる一方で、一人一人の学びが日常生活の中で活用されたり、将来の社会生活の中で発揮されたりすることを想定した場合、学校や学級という集団の中で、他者と関わりながら学校生活を送ることも重要な視点となる。

今年度の研究テーマは主題を「共に生きることを学ぶ授業づくり」とし、副題として「自他を尊重し、共に高め合う子供の育成をめざして」としている。本テーマを進めるに当たっては、個別の実態を踏まえた学習に留まることなく、これらを共有して学習を進めていくことが重要となる。学習や活動などの体験等を共有し、他者の存在について理解を深め、これらの経験を積み上げることによって、特別支援学級内で仲間意識をもつことにつながる考える。池畑(2021)は、児童生徒の発達について「自己の身体・姿勢が外界の事物や他者とのかかわりの接点であり、そこから関係の発達や認識の発達が押し広げられ、自己像を確立していく過程を、発達の全体像として理解」することの必要性を述べている。単に一人で学習を進めているのではなく、個人の発達の促進のために、他者と関わり合いながら、学習や体験を進めていくことの必要性が示されている。学習課題が異なる児童生徒が集団で学習することを意識した場合、湯浅(2006)は、「二つの学習課題に分かれた子供が同時に参加しうる場面・教材を設定することによって、共通の学習を保証するのである。学習課題は異なりつつ、共通の場面・教材だからこそ、子供は相互に意識しながら、学習に望むことが可能になる」と述べている。知的障害のある児童生徒においても、個々の課題にアプローチする学習展開に加えて、学習集団として自他を意識し、学習内容に対する理解を共に高め合うためには、同じ題材を用いつつ、異なる学習課題に取り組み、さらに学習や活動を共有していくことが必要であると考えられる。

2 本校の特別支援教育の現状と課題

「自他を尊重し、共に高め合う子供」とは、日々の生活の中で、自分の思いや考えをもち、友だちとかかわろうとしたり、友だちと学習や活動を共有しながら、自分の力を発揮して課題に取り組もうとしたりする姿を目指し、学習環境の中でお互いの人間関係を深め、集団で一緒に学び合うことである。本校特別支援学級では、児童生徒と一緒に過ごした仲間のことを意識しながら、共に学んだ日々自信や達成感をもち、卒業後のステージに進んでいく姿を目指して、日々の指導に取り組んでいる。本校の特色として、小学校中学校共に、特別支援学級内での授業を基本としていること、全学年合同で実施する授業が組まれていることが挙げられる。特別支援学級内での授業を基本としていることについては、学

級として集団で学習を進めることを大切にしている。同じ題材を扱い、集団で学習することで、仲間意識を育むことを目指している。全学年合同授業については、小学校1から6年生という集団や中学校1から3年生という集団が集い学習をすることで、下級生が上級生を見ることが憧れや期待をもつことにつながったり、上級生にとっては下級生に対して思いやりをもつことにつながったり、気を配ったりする気持ちを高めることができる。

小学校段階では、同じ学年で6年間過ごす中で、2学年の複式による学級形態となっており、1・2年生を低学年、3・4年生を中学年、5・6年生を高学年の学級編成で日々の教育実践を行っている。複式形態とすることで、低学年期、中学年期、高学年期と3回同じクラスで過ごすことになる。また、1から6年生における合同の授業を実施しており、低、中、高学年の児童が一同に介して学習を行う場面を設定している。このようにクラス内での関わりだけでなく、縦割りの関わりを意図的に仕組み、6年生を中心とした活動を取り入れたり、その姿を下級生が見る場面を取り入れたりして、学習している。中学校段階では、学級・習熟度別・3学年合同というように、目的に応じて集団を変えながら授業を実施している。小学校段階よりも比較的人数の多い集団の中でお互いを意識しつつ、他者を認め、折り合いを付けながら共に高め合うことが求められる。他者とかかわりの中で自分を知り、自分らしい進路の実現に向けて主体的に考えられるよう学習している。また、小、中学生と一緒に交流することを意図した活動も行っており、異学年の交流などを取り入れながら、学習や活動を進めている。

本研究では、本校の特色を踏まえて「自他を尊重し、共に高め合う子供」を目指した授業づくりについて検討することにした。小学校・中学校段階またはそれぞれの学級内において、発達段階や学級の実態を踏まえて、それぞれの学級内における具体的な姿を示し、その具体を元に整理していく。その上で、設定した知的障害教育で目指す子供の姿について検証する。

本研究で目指す児童生徒像を、以下のように設定し、この姿を目指して授業を実施する。

特別支援教育（知的障害）で目指す子供の姿	知的障害教育の授業づくりの特徴
・自分の思いや考えをもち、仲間と生活を共にする中でもてる力を発揮する子供	・子供一人一人の実態に応じた学習内容と活動 ・発達段階に応じた他者とかかわる場面の設定 ・縦・横のつながりを意識した授業

3 研究の目的

知的障害教育における共に生きることを学ぶ授業づくりにおいて、児童生徒の自他を尊重し、共に高め合う子供の育成を目指して授業を実践する。そこで表出された児童生徒の具体的な姿から目指す子供の姿を整理することを目的とする。

4 研究の方法

- ①知的障害教育における集団での学習について文献を収集し、本校の授業の一斉授業の在り方についての特色を整理する。
- ②知的障害教育における「自他を尊重し、共に高め合う子供」について、学級ごとの授業実践を提案する。
- ③研究会で授業提案から協議の柱を設定し、研究協議を行う。
- ④「自他を尊重し、共に高め合う子供」の具体的な姿を捉え、その成果と課題を整理する。

【引用・参考文献】

文部科学省（2018）,「特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）」

丹野哲也(2022),「各教科等を合わせた指導」の意義と課題－育成を目指す資質・能力と指導の形態－」
『発達障害研究』, 第 44 巻, 第 3 号, 236－244.

池畑美恵子(2021),『感覚と運動の高次化理論からみた発達支援の展開』学苑社

湯浅恭正(2006),『障害児授業実践の教授学的研究』大学教育出版

キャリア教育研究会(2024),『本人を中心とした柔軟な思考としなやかな対話をとおして新たな価値を
相互に生み出すキャリア発達支援』ジアース教育新社